

英語に未来時制はあるのか

—中高の時制とアスペクト指導における提言—

大村吉弘*

Is There a Future Tense in English ?

—Suggestions for Teaching Tense and Aspect at Junior
and Senior High School in Japan—

(OMURA Yoshihiro)

第1章：はじめに

一般に、英語には現在、過去、未来の3時制があると言われるが、言語学者の間では、多くのヨーロッパ言語同様、英語には未来時制はなく、過去と非過去の2時制とする意見が多い(個々の意見は第3章参照)。また、中学校、高等学校等で英語を教える教員も、時制のコンセプトをわかりやすく説明するために、「未来時制」という用語を用いて教えている場合がまだまだ多いようである。

言語学者の見識、英語教員の知識、中学校で教えるべき内容、また現職教員が学生時代に学んだ内容と最新の概念がそれぞれ異なるため、混乱をきたしているのではないかと考える。そこで本稿は、時制とアスペクトに焦点を当て、英語の未来時制および未来表現について言語学者の見識に基づいて考察を行う。さらに、学習指導要領および教科書での扱いを検証し、教員の授業での実際を明らかにし、特に中学校において、時制に関し何をどこまで教えるのが望ましいかを、英語教員および英語教員を目指す人たちに提案したい。

また、本稿のタイトルに用いている用語であるが、研究書には、「テンスとアスペクト」とするものや「時制と相」とするものがあるが、和語とカタカナ語を比較し、一般的に認知度の高い「時制とアスペクト」とした¹。

* 近畿大学国際学部国際学科教授

[キーワード] 時制とアスペクト、中高、指導要領、教科書、授業

1 国立国語研究所の運営するコーパス「中納言」によると、『時制』の使用例が129件であるのに対し、『テンス』は16件、『アスペクト』が26件であるのに対し、『相』は0件であった。

第2章：時制とアスペクトの捉え方

時制とアスペクトはどちらも「時」に関する情報を伝えるものであるがために、混同されることも多く、その違いも完璧に明白ではない。伝統的学校文法においては、英語には表1が示すように、12時制があると教えられてきた。

表1：英語の時制

	過去	現在	未来
基本形	studied	study	will study
進行形	was/were studying	am/are/is studying	will be studying
完了形	had studied	have studied	will have studied
完了進行形	had been studying	has/have been studying	will have been studying

そこで、どうして時制とアスペクトが混同されるのかについて、検証したい。まず考えられることは、認知言語学において、時制とアスペクトの概念自体が変わってきた点である。詳細な変遷については宗宮（2010）を参照されたい。1931年にイエスペルセン（Jespersen）が包括的な文法書 A Modern English Grammar において、2時制を提示し、アスペクトは時制の下位範疇として扱った。リーチ（Leech, 1971）は現在/過去、進行/完了の体系を提案した。一方、コムリー（Comrie, 1985）は Tense において、will を用いた未来時制も含めた3時制を主張したが、少数派であった。クワークら（Quirk et al., 1985）は時制と時間の違いを強調し、A Comprehensive Grammar of the English Language において今日を代表する見解となっている英語の2時制（過去・現在）と3アスペクト（単純・完了・進行）を提示した。これが現在、認知言語学においても、教育現場でも浸透している考え方となっている。

しかし、前述のとおり、表1のように英語には12時制があり、未来時制があると考えられる日本人英語学習者が多い。例えば、日本最大級の無料 Q & A コミュニティーサイトである「教えて！goo」に次の様な質問がある。「英語の時制が12個あるのは知っています。でも、日本語の時制はいくつあるのでしょうか？」²そして、これに対するベストアンサーが「英語の時制は12ではありませんよ。これは「時制（テンス）と体（アスペクト）」の組み合わせパターンです。（中略）英語において時制（テンス）は三種類、過去・現在・未来です。（後略）」となってお

2 <https://oshiete.goo.ne.jp/qa/423852.html>. 2021年4月28日閲覧

り、時制とアスペクトを分けて説明しているものの、「時制は3種類」と言い切っている。そして、その回答に対するお礼が「多くの先生が過去完了などを時制として扱っているのでそう思っていました。」となっていることから、中学校・高等学校の授業では、12時制という説明が一般的であり、未来を表す表現は、「未来時制」として教えられているという印象を受ける。

英語を第二言語として学習する日本人のみならず、英語母語話者の多くも、英語には「未来時制」があると捉えるようである。インターネット上の複数の類似の読者Q&Aサイトにおいて、“Does English have a future tense?”（英語に未来時制はあるのか）という質問に対しての回答を見ると、「未来時制はない」とする言語学者寄りの回答をするサイト（Fluent U）、「未来を表す多くの表現がある」とそつのない回答をするサイト（Real Grammar）、「言語学者だけが未来形はないと主張する」というサイト（Stack Exchange）など、様々である。読者の投票を募るサイト（Using English.com）によると、一般読者の62%は未来時制はあると言い、38%はそうではないと言う。やはり、英語母語話者の間でも、一般的には英語には未来時制があると考える人が多いようである。

第3章：英語に未来時制がない理由

では、英語には未来時制がないと主張する根拠について見ていきたい。英語に未来時制はないと主張する多くの意見は、英語には動詞の未来形がないことを理由にあげる（例 Quirk, et al.）。確かに、過去形は、規則変化動詞であれば語尾に -ed をつけ、不規則変化の動詞の場合は、異なる過去形を持つ。それに対し、未来形への動詞の語尾変化はなく、助動詞の ‘will’ または ‘be going to’ を使わなければならない。つまり、英語では、未来の事象は ‘will’ を用いて表現可能だが、形の上からは、未来時制は存在しない。これを理由に多くの文法書は2時制（過去・現在）を採用する。例を挙げると、Cambridge Grammar of English (Carter & McCarthy, 2006)、Meaning and the English Verb (Leech, 2004)、COBUILD Advanced Dictionary of English (2018)、Practical English Usage (Swan, 2005)、現代英文法講義（安藤、2005）などである。それに対し、未来時制を主張する言語学者もいる。デクラーク (Declerck, 1991)、ソルキー (Salkie, 2010) は未来時制があるとし、ソルキーは ‘will’ の未来時の指標の役割が大きいと主張する。

英語に未来時制がないとするもう一つの理由は、未来時制を表す主な表現として挙げられる ‘will’ を時制の形態素とするには、あまりにも豊富な他の法的な意味（推量、予測、可能性、

意思等)を持っており、「未来」を表すものではないからである。久野、安藤、Quirkらは、この主張をもって、‘will’は未来を表すものではなく、英語には未来時制はないとする。例を挙げると、2aのmayが未来を表す形態素ではないのと同様、1aの‘will’も未来を表すものではなく、可能性の度合い(推量)を表しているだけであると主張する。

1a. It **will** be cold and cloudy tomorrow. (未来)

1b. She **will** be out now. (現在)

2a. It **may** be cold and cloudy tomorrow. (未来)

2b. She **may** be out now. (現在)

つまり、3が示すように、‘will’は他の助動詞とともに、法助動詞の体系を形成しており、‘will’だけを取り出してそれだけが未来を指す文法形式であると言えないとする。

3. He **will/can/may/must/should/might** come tomorrow.

しかし、他の印欧語が他の用法から未来時制を表す形態素を形作っていったのと同様、英語においても‘will’が未来時制を表す形態素と認識されるようになるかもしれない。実際、4aは意思を表しているが、4bは単純未来を表していることに異論はないのではないだろうか。

4a. I will go visit you sometime. (意思)

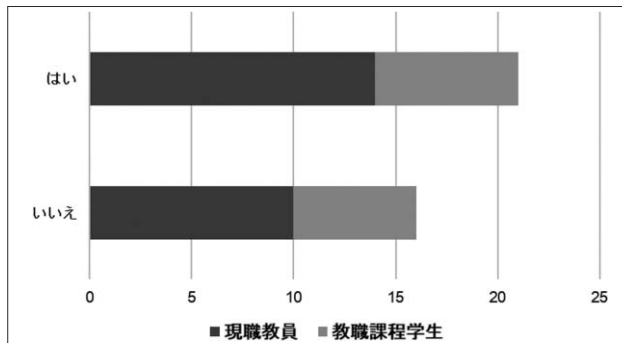
4b. I will be 60 in a few years. (単純未来)

第4章：教員の意識、授業で状況

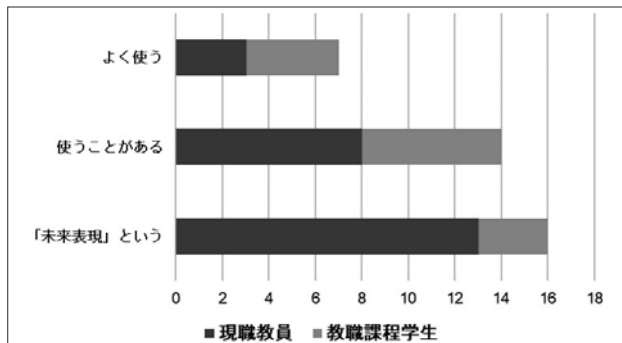
第2、第3章において、現在では、英語の時制は過去・現在の2時制であると捉えることが一般的であるが、一般的な認識は必ずしもそうではないことが示された。では、実際の中学校、高等学校の授業ではどのように未来が扱われているのだろうか。次の3項目について、無記名のアンケートを実施したところ、現職教員24名、教職課程を目指す学生13名の計37名の回答を得た。

- (1) 時制についての説明時に、「英語には現在、過去、未来の3時制がある」と説明する
- (2) 「未来形」「未来時制」という表現を使う
- (3) ‘will’ と ‘be going to’ の違いについて、‘be going to’ はすでに決めてある予定や計画を述べるときに使うと教える

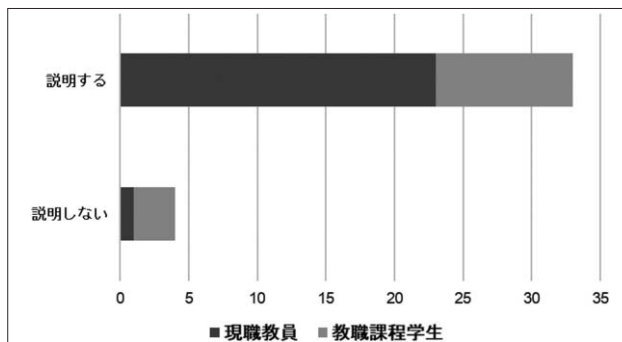
グラフ1：「英語には現在、過去、未来の3時制がある」と説明する



グラフ2：「未来形」「未来時制」という表現を使う



グラフ3：「‘be going to’ はすでに決めてある予定や計画を述べるときに使う」と教える



以上、3点についての回答をグラフにしたものが、表1、表2、表3である。表1に示す通り、英語には現在・過去・未来の3時制があると説明するとの回答が6割弱(37名中21名)あり、3時制であると説明する場合の方が多いたことが分かった。また、表2から、現在ではより望ましいと考えられる「未来表現」という表現よりも、昔ながらの「未来形」「未来時制」という表現を用いるとの回答(「よく使う」が37名中7名、「使うことがある」が14名)と6割弱あったことがわかる。ただし表3から、‘will’ と ‘be going to’ の違いについては、9割(37名中33名)が ‘be going to’ はすでに決まっている予定について用いられると説明するとの回答があったことがわかる。

つまり、学校現場において、今でも「未来時制」や「未来形」という表現を用いた説明がなされていることが、英語には3時制あるという考えが広がっている原因であると考えられる。

第5章：学習指導要領・教科書での記述

前章では、実際の授業における「未来」の扱いについてアンケートをもとに見ていったが、授業の核となる、学習指導要領や検定教科書において、時制や「未来」がどのように扱われているか、検証したい。

学習指導要領は、およそ10年ごとに改訂されており、検定教科書もそれぞれの学習指導要領に従って、作成される。表2は、各学習指導要領における未来に関する記述、およびそれぞれに準拠発行された東京書籍の New Horizon 2 での未来の記述を抽出したものである。

表2：中学校学習指導要領、New Horizon 2 における「未来」の記述

施行年	学習指導要領での未来の扱い	出版年	New Horizon 2 での記述
S37	動詞 時制は…未来形	S41年度	未来形
S47	動詞の時制のうち…未来形	S50年度	未来形
S56	動詞の時制のうち…未来形	S62年度	未来形
H 5	動詞の時制のうち…未来形	H 5 年度	未来の表現
H14	動詞の時制など…助動詞などを用いた未来表現	H14年度	未来のことを表す
H24	動詞の時制など…助動詞などを用いた未来表現	H24年度	未来のことを表す
R 3	動詞の時制及び相など…助動詞などを用いた未来表現	R 3 年度	未来表現

表2から、平成5年施行の学修指導要領までは「未来形」という表現が用いられていたが、平成14年施行のものからは、「未来表現」という言語学分野でも確立されたより適切な表現に切り替えられていることがわかる。検定教科書 New Horizon 2 においては、学習指導要領を先取りする形で、平成5年発行の教科書から「未来形」ではなく、「未来の表現」と表記されている。また、最新の令和3年施行の学習指導要領において、これまではまったく扱われていなかった「相」、つまりアスペクトの考え方が示された点が特筆できる。

次に、他社の現行（平成27年検定）の教科書も含め、未来に関する記述を抽出してみた。

表3：現行教科書における時制、「未来」に関する記述、用法

教科書	時制	未来
One World 2	現在形、過去形	will - 未来、be going to - 予定
New Crown 2	現在形、過去形	will, be going to - 未来を表す表現
New Horizon 2	現在形、過去形	will - 意思、未来、be going to - 予定、計画
Sunshine 2	現在形、過去形	will, be going to - 未来表現

表3が示す通り、どの教科書においても、時制は現在形、過去形という表現だけが用いられており、「未来形」という表記は見られない。また「未来」に関する表現、用法については、will は未来、be going to は未来、または予定を表すとしているものが多いが、will と be going to の使い分けを明記しているものとしていないものは半々であった。

また、最新の令和3年施行の学習指導要領に準拠する令和3年使用開始の教科書において、未来に関する記述をまとめたものが、表4である。表4から、未来に関する用法がこれまで以上に細かく説明され、New Crownを除き、willはその時決めた予定であるのに対し、be going toはすでに決まっている予定を表すことが明記されていることがわかる。さらに、表2に示す現行教科書までは「未来」に関する用法は中学校2年生まで提示されていなかったのが、新教科書においては、半数の教科書では中学校1年生で提示されることが大きな変化である。

表4：新教科書における「未来」に関する記述、用法

教科書	未来
One World 1	will - 未来についての予想、be going to - 予定、計画
New Crown 1	will, be going to - 未来を表す表現
New Horizon 2	will - その時決めた予定、未来、be going to - 決まっている予定、未来
Sunshine 2	will - その時決めた予定、未来、be going to - 決まっている予定、未来

(近年の学習指導要領では、中学校で学習すべき項目が網羅されているが、どの学年でどの項目を学習するかは、教科書に委ねられている。) 時制、特に未来に関する表現・用法の説明において、より適切な表現、用法を教科書が提示するようになることを考えると、教える立場の教員もそれに沿った教え方、扱いを心がける必要がある。

では、実際に授業ではどこまで教えることが望ましいかについて提案していきたい。実際の授業では時制とアスペクトの一覧は表5のように教えることが望ましいが、中学生には「相」という表現ではなく、「進行形」「完了形」という表現が適切である。

表5：時制とアスペクトのマトリックス

時制	基本形	進行形 (相)	完了形 (相)	完了進行形 (相)
過去時制	walked 過去形	was walking 過去進行形	had walked 過去完了形	had been walking 過去完了進行形
現在時制	walk 現在形	am walking 現在進行形	have walked 現在完了形	have been walking 現在完了進行形
未来表現 (will)	will walk 未来表現	will be walking 未来進行形	will have walked 未来完了形	will have been walking 未来完了進行形

前述のとおり、今の教科書では、英語には現在と過去の2時制からなり、時を表すものは、過去時制、現在時制、そして「未来を表す表現」からなり、‘be going to’, ‘will’ は未来を表す表現の一部であることを提示することがよいと考える。そして、‘be going to’ はあらかじめ決まっている予定や計画について、‘will’ は未来のこと、その場で決めたことを表す際に使われることを示すとよい。その際、次のような違いがはっきり分かるような用例とともに示すことが望ましい。

〈学校で〉

Keiko: Do you want to have tapioca drink after school ?

Yoshiko: Sounds good. I **will** see you at the school entrance at 3:30 PM.

〈お母さんから電話〉

Mom: Are you coming home straight ?

Yoshiko: No, I'm **going to** have tapioca drink with Keiko.

Keiko との会話の中では、その場で決めたことなので、‘will’ を用いるが、お母さんとの電話の会話時には、もう決まっていた予定であるので、‘be going to’ が用いられている。もちろん、このようなニュアンスの違いをすべての生徒が使い分けられることを期待するのではな

く、違いにまで気を配る生徒のための情報とした方がよい。

さらに、未来を表す表現は複数あるが、すべての用法が出そろった段階で、まとめとして次のように5用法をまとめて提示するとよい。

- | | |
|--------------------|--------------------------------|
| ① will + 原形 | He will leave tomorrow. |
| ② be going to + 原形 | He is going to leave tomorrow. |
| ③ 現在進行形 | He is leaving tomorrow. |
| ④ will + 進行形 | He will be leaving tomorrow. |
| ⑤ 現在時制 | He leaves tomorrow. |

奇しくも、この5用法は Leech が Meaning and the English Verb (2004) で提案したものと同一である。

第6章：最後に

本稿では、時制とアスペクトに焦点を当て、英語の未来時制および未来表現について言語学者の見識に基づいて考察を行った。現在では英語には現在と過去の2時制と未来を表す表現があるとの見解が一般的であることを示した。さらに、学習指導要領および教科書でも、言語学での見識にならい、平成14年以降の学習指導要領では「未来形」という表現は用いられなくなり、同年以降の検定教科書においても、「未来を表す表現」として扱われていることが分かった。

しかし、実際の授業においては、いまだに「未来形」または「未来時制」という説明が一般に行われていることから、英語には現在・過去・未来の3時制があるという理解を助長しているのではないかと考えられる。「未来時制」という用語が用いられなくなり、「未来を表す表現」と学習指導要領にも明示されているのであるから、指導すべき事項について、言語学的な知識を取り入れ、用語の変化に対する教員の意識改革を期待したい。‘will’ や ‘be going to’ は「未来時制」ではなく、「未来を表す表現」の代表的な手法であると教えることこそが、より正しい教え方であろう。さらに、実際の授業で提示すべき時制のマトリックスを提案した上で、時制に関し、複数の未来表現を整理して提示することの重要性や、ニュアンスのちがいの提示例を示した。

以上のことから、ことばという生きた科目である「英語」を教えるうえで、言語学の新たな進展に伴い、中学校での教授内容にまで変化が起きることが見て取れた。ことばは変わるもの

であることを忘れず、新しい内容に対応できるようアンテナを張り、柔軟に対応していただきたい。

参考文献

- Carter, R. and McCarthy, M. (2006) *Cambridge Grammar of English*. Cambridge University Press.
- Collins *COBUILD Advanced Dictionary of English*. Harper Collins.
- Comrie, B. (1985) *Tense*. Cambridge University Press.
- FluentU <https://www.fluentu.com/blog/english/english-future-tense/> (2020.12.19閲覧)
- Grammaring.com <https://www.grammaring.com/> (2020.12.19閲覧)
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Jespersen, O. (1931) *A Modern English Grammar*. Allen & Unwin: London.
- Larsen-Freeman, D and Celce-Mucia, M. (2016) *The Grammar Book. Form, Meaning, and Use for English Language Teachers*. (Third Ed.) Heinle.
- Leech, G. (2004) *Meaning and the English Verb*. (Third Ed.) Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Real Grammar <https://www.realgrammar.com/tenses/does-english-have-future-tense/> (2020.12.19閲覧)
- Salkie, R. (2010) Will: Tense or modal or both? *English Language and Linguistics*, 14 (82), 187-215.
- StackExchange: English Language & Usage <https://english.stackexchange.com/questions/429932/is-it-true-that-english-has-no-future-tense> (2020.12.19閲覧)
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage*. Oxford University Press.
- Sweetser, E. (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Szmrecsanyi, B. (2003) BE GOING TO versus WILL/SHALL- Does syntax matter? *Journal of English Linguistics*, 31, 295-323.
- Tyler, A. (2012) *Cognitive Linguistics and Second Language Learning—Theoretical Basics*

and Experimental Evidence—. Routledge.

UE: UsingEnglish.com <https://www.usingenglish.com/poll/13.html> (2020.12.19閲覧)

Yule, G. (1998) *Explaining English Grammar*. Oxford University Press.

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.

上山恭男 (2016) 『機能・視点から考える英語のからくり』 開拓社.

柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社.

久野暲・高見健一 (2013) 『謎解きの英文法—時の表現』 くろしお出版.

国立教育政策研究所 学習指導要領データベースインデックス <https://www.nier.go.jp/guideline/> (2020.12.19閲覧).

宗宮喜代子 (2010) 英語のアスペクトについて 東京外国語大学『語学研究所論集』15, 59–80.